
自己中心的正義論

灰河 風流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自己中心的正義論

【Nコード】

N3080I

【作者名】

灰河 風流

【あらすじ】

グレイとルイスの2人は、或る会社の社長を暗殺する任務を任せられる。

作者の初アクション作品で、思い入れのある作品でもあります。

正義の定義（前書き）

これはメルマガで配信していた作品です。故に一話一話が短いです……。

正義の定義

正義とは何か。命懸けで戦う理由とは何か。僕は拳銃を手にしたとき、いつも疑問に思う。

そして、それを何度も何度も繰り返していくうちに、僕はある結論に辿り着いた。

……答えなど、はじめから存在しないということに。

正義など、所詮は自分の偏った考えでしかないのだ。決まったものである必要もない。

命懸けで戦う理由は、数限りなく、人それぞれである。答えという言葉で言い表せるようなものでもない。そしてその理由を、言葉では表せられない場合も少なくない。

僕の正義？

そうだな……僕が所属している組織と、僕自身とでも言うておこうか。

あの組織に入ろうと思ったのは、軍に対抗できるほどの知識と、戦力を兼ね備えていたから。

正直、組織の領域^{シム}争いなどは、僕にとってはどうでもよいこと。日々のミッションは、訓練にしか過ぎない。

僕の目的は一つ。軍人に殺された両親の敵討ち、ただそれのみ。

……誰が何と言おうと、僕は軍の狗に成り下がったかつての友人の首をはねるつもりだ。組織の情報によると、奴はつい最近、大佐の地位にのし上がったらしい。

自分の地位を守るがために、罪無き国民を無惨に操る。当の本人たちは、それを当然のことのように思っている。

それが、どうしても許せなかった。

自分のような者から、何もかもを奪っていく奴らが。

「おい、思い出に浸っているのは良いが……そろそろ出撃するぞ」

「わかってますって」

漆黒のスーツに身を包み、相棒の二丁拳銃をホルダーに収めたなら、靴を鳴らして踏み出そう。

……例え、この先の道が、どんなに険しくとも。僕は歩を止めることを知らない。さあ、今日も命懸けの訓練の始まりだ。

下っ端の憂鬱

一瞬の気の緩みが、命取りとなるこの仕事。しかし、その分報酬が高いのは、この仕事の良いところ。

まだまだ組織の下っ端である僕には、軍の最高機密に関わる依頼などさせてもらえる訳がなく……それはもう、先輩と二人で泣く泣く雑用をする毎日。

他の組織との抗争で出た死体の処理や、深夜の領域^{シムス}の警備、そして広過ぎるアジト内の掃除……。

こんなことばかりをして、いつになったら軍に近付けるのだろうかと思痴を漏らしたくなるが、先輩いわく、現在の組織のトップも、最初は僕らと同じような雑用しかさせて貰えなかったらしい。

ミッションは訓練にしか過ぎない、と格好の良いことを言っただが、実際に身についているかと問われれば、それは非常に怪しいところである。

今は先輩の言葉を信じるしかないだろう。

今回のミッションは、珍しく僕ら下っ端の中では最も難易度の高い暗殺。

先輩と僕に回ってきたのはこれが始めてで、これが上手くいけば、更に高額報酬のミッションを引き受けることができる。

今回の暗殺の依頼主は、個人的にネーミングセンスに欠けていると

思う建設会社、メランコリックカンパニーの社長。

自分の会社が業界で二番目だということが気に入らないらしく、今一番儲けていて、メラカン（と先輩が略していた）と対立しているラック社の社長を始末して欲しいのだという。

依頼を受けてから詳しく内容を聞いた僕は、正直このミッションを遂行したくないと思った。

自分たちの都合だけで相手を殺す、軍の奴らと姿が重なったからだ。しかし、一度引き受けてしまった依頼を断ることは組織の名を傷付ける行為に当たり、

先輩も新たなミッションに目を輝かせていたので、僕はただ依頼主の言葉にひたすら頷いていた。

考えてみれば人殺しも始めてのことではあるが、もちろん失敗は許されない。それが組織のポリシーなのだから。

任務開始

「小僧、今社長が何処にいるか分かるか？」

夜の闇に紛れ、二人の黒が身を潜める。

辺りにターゲットを守るための侵入防止システムセンサーが張り巡らされていることから、どうやら一筋縄ではいかないらしい。

どうするべきだろうか、この状況は。

「情報屋のフォルツの分析データによると、この時間帯、社長はいつも自室でクラシック音楽を聴いているそうです」

小型のノートパソコンを無心で操作しながら、この物語の主人公である 그레이 は小さく呟く。

「そりゃあ良い。思い切りリラックスしてとこで、直ぐに脳天撃ち抜いて楽にしてやれるからな」

口許に手をやり、嫌な笑いを見せる ルイス に 그레이 は溜息をついた。

「先輩、目が笑っていませんよ。それに脳天を撃ち抜くって言うたつて……先輩が持つてるの、それ日本刀じゃないですか」

一瞬、ルイスの目が見開かれる。

そして自らの腰に手をやり、銃ではなく刀があることを確認すると、もう一方の手で頭をかきながら、困ったように口を緩ませた。

「今日だけな。俺、実は日本の武士に憧れててさ。今回のミッションは初めて人を……」

そこで一旦、言葉が途切れ、ルイスは己の手を見つめる。

「なあ小僧。俺たち……今日、人を殺すんだぜ？」

「ええ、そうですね。この手を血染めにするんです。もう、後戻りできません」

「それが組織のポリシー、ってか」

それから長い沈黙が続く中、二人は警備が手薄になる瞬間を、今か今かと待ち構えていた。

「先輩！この建物のセキュリティシステムに侵入することに成功しました。5分間だけ、全てのセンサーを停止させるが出来ます」

「よし、あとどれくらいで始められる？」

「警備員の動きを考えると……今、この瞬間から30秒後です」

黒が動く。

獲物を狙って。

夜の闇は、深くなるばかり……。

足止め

死を恐れてはいけない。

誰にでも、いつかは訪れるものなのだから……。

「あと、25秒」

動くべき時を待ち、黒の二人は息を潜める。

「なあ、小僧。思ったんだけどよ。暗殺って、どうやるんだ？」

「あと20秒……って、先輩、今更何言ってるんですか！？」

ルイスのあまりに突然過ぎる問いに、グレイはつい声を荒げてしまう。

それもそのはず。この程度のミッションを失敗しては、この自分たちに依頼がくることはないのだから。

「昨日説明したじゃないですか！」

「本当にすまない……寝ていて聞いてなかった」

ルイスはグレイに向かって頭を下げ、沈んだ声を出す。頼りない先輩に苛々しながらも、グレイは早口でまくし立てた。

「あと15秒しかないので、簡潔に説明しますね。今、僕らは裏口近くの茂みにいます。時間になったら、僕は裏口の警備員を倒しに

行きますので先輩はその隙に刀で監視カメラを壊して下さい」

「わかった」

ルイスの目付きが変わる。情報を頭に叩き込むために、集中している証拠だ。

「裏口から侵入したら北の非常階段を使って3階に上がり、管理指令室へ行って完全にセキュリティシステムを止めます。

そこにいる警備員は僕が倒しますので、

先輩はその監視カメラを壊して下さい」

「……ああ」

「それから4階へ上がり、

一番右端の部屋に、社員を装って入って社長を殺害します。

僕が社長を撃ち抜くので、先輩は再起動しても大丈夫なよう監視カメラを壊して下さい。僕の説明は以上です」

「なあ、俺カメラ破壊しかしてないか？」

「気のせいですよ」

それは事実なのだが、グレイはルイスの発言を適当に受け流す。

「3秒前……2、1、突入開始！」

その言葉と共に、グレイは小型ノートパソコンのエンターキーを押して懐にしまうと、次の瞬間、空中で静止する。

草木を飛び越し、身を屈めて素早く見張りの警備員に近付いて銃身で後頭部を殴ると、

鈍い音を立てて警備員は意図も簡単にその場に倒れ込んだ。

それと同時に、遅れて出て来たルイスが渋々監視カメラを真つ二つに割り、二人は裏口から侵入することに成功する。

幸いにも近くにあった非常階段を音を立てずに上り、扉を開けると、そこに広がるは一面赤い絨毯を敷き詰めた長い長い廊下。

「……小僧、その管理指令室とやらは、一体何処にあるんだ？」

「えーっと、確か突き当たりの部屋だったような気がするのですが」

囁くような声で、辺りに気を配りながらも足は止めない。

「時間がない、さっさと行くぞ」

「わかってますって」

「……お前ら、そこで何してる？」

聞いたことのない声。

その場で聞いてはならぬはずの言葉。

廊下のだ真ん中で、二人は身体を石のように固まらせ、首だけで後ろを振り返る。

そこにいたのは警備員。

数は……約50人ほど。

「ダークスーツに刀と銃？いかにも怪しい奴らだな。此処にいる理由は後で問う。……この二人組を拘束せよ！！」

侵入早々、哀れにも見つかってしまったグレイとルイス。既に暗殺どころではなくなっている。

しかし、こんな無惨な状態で依頼に失敗すれば組織からは抹消され、グレイは復讐は疎か、軍に近付くことさえできないままこの世を去ることになる。

それは何としても防がねば。

「先輩どうします？」

「決まってるだろ、相手を動けなくするんだよ」

「言うと思いましたよ。尻尾を巻いて逃げるのは組織のポリシーに反しますものね。……コイツらなんて、ナイフで充分です。さっさと片付けてしましましょう」

「血を見てビビるんじゃないぞ？」

「馬鹿にしないで下さい」

2対50という、圧倒的不利な状況を逃れられるか。

戦いの旋律が今、奏で始められる。

チェックメイト

敵に背中を向けてはならない。その一瞬の気の緩みが、永遠の眠りに変わるだろう。

50人を相手に、ナイフで充分だと言い切ったグレイ。ただでさえ危険な状況にも関わらず、なおも自分を死に追い詰めるのか。

「お前、そのナイフ1本でどうやって大勢を相手にするんだよ!？」
命が懸かっているのだ。ふざけた真似などできるはずがない。

二人を円状に囲み、今にも攻撃を仕掛けてきそうな警備員たち。それに向かって、冷や汗をかきながら日本刀を構えているルイスと対象に、グレイは余裕たっぷりの表情を浮かべている。

「さすがに1本とまでは言っていませんよ。銃の乱射は流石に惨過ぎますからね、殺さない程度に」

グレイはなるべく死体を出したくはなかった。組織に忠誠を誓う前に刻まれた醜い記憶を呼び覚ますことを、何よりも恐れていた。

懐から銀色を二つ取り出すと、それぞれを両手でしっかりと握り、敵の司令官らしき人物に睨みをきかせる。

「我々に抵抗する気か？少しは素直になったらどうだ、糞餓鬼共め」

司令官は鼻で笑い、筋肉質な身体の腰から下げている鞘からサーベルを引き抜くと、それを自らの顔の前へ持っていった。

「全てを捧げてでも、主をお守りするのが我らの務め。……例えば、まだ有望な未来がある若者でも、主の安全を脅かすようでは例外は認められない。容赦はせん、お前らは後に泣いて詫びるのだ！」

この階全体に響き渡るような大声と誓い。

そして、それを跳ね返すような勢いでルイスが自ら戦いの火蓋を切った。

「誰が詫びるかよ、このクソジジイ!!」

一人の黒が、飛躍する。シャンデリアの人工的な光を浴びて輝く、研ぎ澄まされた銀の刀を振りかざして。

真紅が辺りに飛び散るのを見ると、グレイは自分に襲い掛かってくる警備員に目掛けて、わざと急所を外しながらの攻撃をし、再び溜息をつくのだった。

「言葉遣い悪過ぎですよ……」

グレイの微かな呟きはルイスに聞こえていたらしく、敵の腹部を切り裂きながら、ルイスは口を尖らせる。

警備員の数も徐々に減り、二人に希望が見え始めたその刹那、戦場に一発の銃声が走る。

「クソ……俺の刀じゃ、数発くらったら使い物にならなくなる。も

うどうせ手遅れだ。お前もそろそろ銃を出した方が良い！」

「まだ、100%失敗したとは決まっていけないじゃないですか。それに僕、最初に言いましたよね？……ナイフで充分だ、って。僕は銃を持っている方々を相手にするので、先輩は筋肉サーベルでも先に倒しておいて下さい」

「りよ、了解」

完全に先輩と後輩の立場が逆転しているのは気のせいだろう。

次々に鳴り響く銃声に、金属を弾き飛ばす音が重なる。それは激しさと、グレイのナイフの数を増していく。

無数の銀色が、華麗に宙を舞う。その姿は、まるでジャグリングを行う大道芸師のよう。

「お前すげえな！！」

グレイに言われるがまま、未だに床に伏せない司令官に向かって行ったルイスが、グレイの超人的な身のこなしに目を輝かせた。

「さて、いつまで余裕を保っていられるかな？」

筋肉サーベルこと司令官がルイスに気味の悪い笑みを浮かべると、刃に付着した赤黒い血液を振り払いながら、ルイスは切っ先を司令官の喉元へと向かわせる。

「生憎、俺は余裕なんてものを始めっから持ち合わせてはいないんでね。ただ……」

「ただ？」

「すげえ弱そうだと思ってた後輩があんなに凄いことしてるんだからさ。その先輩である俺は、もつと格好良いとこ見せなきゃならねえ。だろ？」

ルイスの攻撃を紙一重で避けながら、その言葉に、司令官は益々ルイスを嘲笑う。

「どうやらその心配はいらないぞ。お前らが御丁寧にも止めて下さったセキュリティシステムは、既に完全に再起動しているからな！」

何たる失態。失敗に重なる、更なる失敗。50人もの敵は、ただの足止めでしかなかったのだ。

「しまっ……」

「待ってください」

ルイスと 그레이 の声が重なる。気が付けばそこは、2人と司令官の3人だけの空間になっていた。

「先輩、逆転勝ちは、まだまだ望めますよ。……さあ、チェックメイトと参りましょう」

王手を急げ。

狗が近付いてくるぞ

足音も立てずに……

「口の弱さ」

「チエックメイトだど？この私を馬鹿にするでない！これは遊戯ではないのだぞ！？」

司令官は 그레이 の発言に、顔を真っ赤にさせる。決して照れていないのではない。相当怒っているのだ。

「リセットのきかねえゲームなんだよ、クソジジイ。分かったらさっさと黙りやがれ！！」

ルイスの回し蹴りが、司令官の鳩尾に鋭くめり込む。鈍い呻き声と共に床に倒れ込む司令官に、ルイスが冷たい眼差しを向けたのを 그레이 は見逃さなかった。

「先輩、行きましょう」

「……ああ」

ターゲットの自室がある階は、想像した通り警備員は一人もいなかった。今頃、一つ下の階で伸びているのだろう。

捕獲されることを覚悟して二人が社長の自室の前に立つと、室内から漏れた大音量のクラシック音楽が嫌でも耳に入ってくる。

그레이 は二丁拳銃を両手に構え、ルイスは一度鞘にしまった日本刀を再び引き抜きながら、もう片方の手に安物の革の手袋をして、白い扉をノックした。

返り血の付着した素手で触るのは証拠が余計に残ってしまう可能性が非常に高いため、流石に気が引ける行為だ。

しかし、既に二人は大変危険な状況にまで追い込まれているので、それはもはや無駄な行いだと言えるよう。

「何故だ？」

二度、三度と扉を叩いてみても、一向に反応がない。

「逃げられましたか。この階のすぐ下での戦いですから……やはり、それが当たり前ですかね」

「馬鹿野郎、今更そんなマイナスなこと言つなよ。お前さっき俺に言っただろ……まだ100%失敗したわけじゃないってさ。その前向きな言葉、どうせなら最後まで貫き通そうぜ？」

呆気なく蹴破られる扉。

煩く鳴り響く警報。

更に音量を増す楽曲。

先程まで全く頼りなかった先輩に、 그레이は遅くも、そのとき初めて敬意を持った。

突入開始のときとは反対に、一足先に部屋に踏み込んだルイス。しかし、数歩進んだところで、すぐに足を止める。逃げられたのなら逃げられたと言えば良いのにも関わらず、ルイスは表情は、口は、一向に何も語ろうとはしない。

そんな仲間を不思議に思い、 그레이がルイスに近付いた途端……視

界に入る光景に、グレイは思わず息を飲む。

それは警報とクラシックの二重奏と共に部屋に広がる、ターゲットの変わり果てた姿……。

数枚の写真に囲まれ、赤に染まった亡き骸の片手に握られていたであろう、虚しく大理石の床に転がっている短銃を見るに、ターゲットは恐らく自害したのだらう。

「こんな終わり方、存在して良いのか？ 今までのことは全て無駄になるのか！？」

ターゲットが死んだことは事実。一刻も早く、逃げ出さねばならない。しかし、足はその場から動かない。

始めて任された、大きな任務。

自分たちと同じ、下っ端の組員からの熱い声援。

そして、己のプライド。

その全てを踏みにじられたルイスから、悔しさと絶望感がとめどなく溢れ出していく。

「……小僧、ミッションはこれで終わりだ。狗に嗅ぎ付けられる前に帰るぞ」

いつもよりもワントーン低い呟きへの返事は、中々返って来ない。

「おい小僧……グレイ、どうしたんだ？」

ルイスがこの部屋に入ってから初めてグレイの方に顔を向けると、

そこには今まで見たことのない、取り乱したグレイの姿があった。

「あゝ あああっ、やめろ、やめてくれ！」

顔面蒼白になり、床にうずくまって自らの膝を抱え、ビクビクと身体を震わせるグレイ。

彼が情緒不安定になっているのにはワケがあった。

「お前、どうしちゃったんだよ！俺、お前を置いて逃げられねえんだぞ！？」

「ぼ、ぼく、俺が、何をした！？お前は……僕が殺す、殺してやる……！！」

己に打ち勝て

差し延べられる手を待っているだけでは何も変わらないのだから。

アクションスター

普段、自分の何倍も落ち着いて行動する 그레이の突然の変わりように、ルイスは慌てふためくことしかできない。

その全ての原因は、亡き骸の周りに散らかった数枚の写真。

全て血痕が付着しており、そこにはターゲットを含めた家族の笑顔が写っている。

恐らく、命を絶つ直前にこれらを目にし、最期の別れを告げたのだろう。

血液、家族、銃、死体。 그레이にとって、一つ一つのモノに関しては何の特別な意味を持っているわけではない。

しかし、その複数のモノが、鎖のように一つに繋がってはどうか。

それは、たちまち 그레이にとって、記憶という名の凶器に変貌するのである。

思い出したくもない過去が、頭の中で渦巻く。裏切りへの恐怖、憎しみ、悲しみ……。その全てが今、 그레이を押し潰そうとしていた。

「ああ、っ……い、怖い、近付く、な……！」

그레이は一体、何に対して怯えているのだろう。ルイスには理解す

ることが出来なかった。しかし今は、自分が後輩を、仲間を守らなくては。このままグレイを放っておくことなどできない。

ルイスは唾を飲み込み、未だに感情の波に溺れているグレイを救出しようという決意を心に刻む。そして、ルイスはついに行動に出た。申し訳ないと思いつつも、うずくまる隙だらけのグレイの頭部を刀の柄の部分で殴り、気絶させると、疲れ切った身体に鞭を打ち、グレイを自らの背に負った。

「コイツ……ちゃんと毎日飯食ってるのか？長身の割には体重がやけに軽いな……なんかムカつく」

意識を失ったグレイは額に汗をかき、ぐったりと地面に向けて手足を垂らしている。その顔には、何かから解放されたような、安堵の表情が浮かんでいた。

それを見て、ルイスが自分の口の両端が緩むのを感じた。そのとき、外からのサイレンの音と、大勢の人間たちの騒ぎ声が同時に耳へと流れ込む。

雑音は段々と大きくなっていき、2人の脱出を、さらに困難なものへと変えていく。

そして2階まで降りたルイスに、更なる不幸が襲った。

「これより、ハウンド中佐率いる第3班の突入を開始する！！」

完全なセキュリティシステムが一度破られ、おまけに警備員が1人も応答しない。

屋敷内からの激しい銃声、物の破壊音。時刻は深夜をまわっている。此処は建物が密集している地域なので、すぐ側にいる住民たちにとってみれば　いい迷惑だ。

睡魔の妨害をされた、その住民の誰かが、まず警察に通報したのだろう。

警察は何回もの銃声と聞き、中で大量の死人が出ていると推測をして軍の支部へ報告をした……というところだろう。

「クソ……！何処から逃げりゃいいんだよ……！」

軍に捕まってはひとまりもない。組織は2人を見捨て、拷問を受ける前に同僚に銃口を向けられ、惨めに死を迎えるのだ。

それはルイスのプライドに反する。父への誓いを、自ら裏切ってしまふことになる。

何処だ。

内部の構造はグレイしか知らない。

脱出方法は何だ？

非常口は見つかる可能性が高い。

此処から飛び出せる場所は……飛び出す？

飛ぶ……そうだ、何故今まで気が付かなかったのだろう。

ルイスは閃く。

窓から飛び降りるという、たった一つの脱出法を。

「こうなったら、アクションスター並のスタントをかましてやる」

ちょうど建物の真後ろにある巨大な窓の前で、軽い助走をつけて跳ぶ。

硝子が外で四方八方に飛び散る派手な音を立てて、ルイスとグレイは空中へと放り出された。

「げっ、あとのことを考えていなかったあああー！」

重力には逆らえず、真っ暗闇に吸い込まれるように落ちてゆく。

2階だが、地上からはかなりの高さがある。2人分の体重と衝撃を、ルイスの両足が堪えることができるだろうか。

この建物のすぐ裏で骨折し、動けない状態の青年と気絶している少年の2人を、軍が見過ごすわけがない。

地面はもうすぐ。

諦めたくはないが、もう終わりだ、と思い、ルイスがついに目を閉じた瞬間、まるでカーチェイスでもやっているのかと疑うほどのタイヤのスリップ音が、自分たちに近付いてくるのを感じた。

このまま、交通事故で死ぬのだろうか。いや、そのほうが有り難いのかもしれない。

ああ……もっと、格好の良い死に方をしたかった。

涙を堪え、死を待つ。しかし、どこかに倒れ込んだのか、多少の痛み以外は一向に襲ってこない。

ルイスが不思議に思い、うつすらと目を明けると、そこは走行中のトラクターの上だった。

「まだ、生きてる……」

生きている心地、そして喜びをかみ締めながら眩き、グレイをその場に横たわせると、

ルイスはトラクターを運転している人物に声をかけた。

「誰だか知りませんが……助けて下さって、本当にありがとうございます……！」

すると、ルイスの言葉に運転手は不気味な笑い声を上げる。

「ルーのそんな言葉遣い、初めて聞いたよ！」

片手でハンドルを握り、荒っぽい運転をしながらもう片方の手で腹を抱え、大笑いする運転手。

その反応に、ルイスは目を見開く。

「俺をそう呼ぶ奴は一人しかいないのだが。もしかしてお前……フオルツか!？」

「御名答」

運転手の正体は、ルイスの幼なじみであり、グレイに屋敷内の構造を教えた、情報屋のフォルツであった。

フォルツは、手を腹から宙に持っていていき、からかっているかのようにヒラヒラと振る。

「アンタらの行動は全てお見通しなんだよ。中間点にいないといけないオレが、わざわざ助けに来てやったんだからさ、ルーも少しは感謝してよね」

フォルツの短い金髪が、車と共に揺れる。髪型や服装が少し乱れているのを見るに、相当急いで来たのだろう。

「……ああ」

自分たちの命を繋いでくれた恩人である幼なじみに、ルイスは心の中で再び「ありがとう」と呟いた。

サイレンが鳴る。

深夜の街が騒ぎ出す。

一台のトラクターは、ただひたすらに走る。罪人たちを乗せて、夜の闇を駆け抜ける……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3080i/>

自己中心的正義論

2010年10月28日05時10分発行